

平成3年度農業観測の概要

農林水産省大臣官房調査課

三 上 徹

はじめに

農林水産省は、昭和27年度から農産物及び農業生産資材等に係わる需給、価格等の動向の分析及び見通し等を内容とする農業観測を作成、公表しています。

「平成3年度農業観測」は、農林水産統計観測審議会の審議を経て、6月4日公表されましたので、その概要を紹介します。

農業観測は、農業者や農業関係者が農産物の生産、出荷、資材の購入等に関する計画を作成し、あるいは指導する際に利用されることを目的としており、普及関係各位に御活用いただければ幸いです。

なお、農業観測の作成に当たっては、天候に左右される作柄は平年作を前提としており、また、見通しは当然幅をもったものであります。説明中に用いられている変動幅は表1のとおりであり、いずれも前年度（前年産、前年同期、前年同月）に対するもので、変動の幅が区分をまたがる場合は「わずかないしやや」等の表現を用いています。

表1 変動の幅をあらわす用語

わずか	±2%台以内
やや	±3～5%台
かなり	±6～15%台
かなりの程度	±6～10%台
かなり大きく	±11～15%台
大幅に	±16%以上

1 農業経済

(1) 国内経済

平成2年度の我が国経済は、設備投資や個人消費等の国内需要主導による長期の拡大を続けましたが、これまでの良好な経済環境からみると変化が現れ、国内面では、労働力需給が引き締まり、人手不足感が広がっていること、また、2年秋頃

から個人消費、設備投資にやや伸び悩み傾向がみられます。

3年度の政府経済見通しによれば、景気は引き続き国内需要を中心とした拡大を続け、実質経済成長率は3.8%程度と見込まれています。

(2) 食料需要

実質飲食費支出は緩やかな増加傾向にあり、2年度は2.2%程度増加したとみられます。3年度は引き続き雇用者所得の増加による実質可処分所得の増加等からわずかに増加すると見込まれます。

(3) 農業就業人口

農業就業人口は、長期にわたる景気拡大を背景に労働力需給が引き締まるなか、減少のテンポを速め、2年度は3.9%減少しました。3年度も引き続きわずかないしやや減少すると見込まれます。

(4) 農業生産資材価格

2年度の農業生産資材の農村価格は、畜産用動物、農業薬剤が下落したものの、光熱動力、飼料が上昇したことにより、1.2%高となりました。3年度は、光熱動力、飼料が下落すると見込まれるものの、農機具、肥料、農薬等が上昇すると見込まれることから、資材全体ではほぼ前年度並みと見込まれます。

＜主要農業生産資材価格の見通し＞

【農業機械】

農機具の農村価格は、60年以降ほぼ横ばいで推移してきましたが、最近の賃金上昇と原材料・部品コストの上昇等により2年度は0.6%上昇しました。3年度は、3年1～12月間の全農買い入れ価格が引き上げられたこと等から、わずかに上回ると見込まれます。

【肥料】

肥料の農村価格は、化学肥料の生産業者販売価

表 2 農業生産資材の農村価格

(対前年度(同期)騰落(▲)率：%)

	62 年度	63	元	2 (概算)				
					4~6月	7~9	10~12	1~3
農業生産資材総合	▲2.1	0.0	3.6	1.2	1.4	1.0	1.4	1.1
肥 料	▲6.9	▲2.0	2.1	2.0	▲0.4	1.7	3.2	3.5
飼 料	▲7.5	2.0	8.0	2.7	6.4	4.1	1.4	▲0.8
農 業 薬 剤	▲2.9	▲3.0	1.3	▲0.3	▲0.4	▲0.4	▲0.3	▲0.2
光 熱 動 力	▲5.4	▲6.0	2.3	9.3	3.9	3.8	17.6	14.2
農 機 具	0.1	▲0.1	3.0	0.6	0.1	0.1	0.1	1.9

資料：農林水産省「農村物価賃金統計」

格が円安等による原材料価格の上昇及び物流経費の上昇等から2年7月に3.86%引き上げられました。また、3年1月には、中東湾岸危機の影響でナフサ価格等が上昇したため窒素肥料が引き上げられたものの、その後円高により、りん酸及び加里肥料が引き下げられたため2年度は2.0%上昇しました。3年度は、窒素肥料原料は低下傾向にありますが、塩化加里等の国際市況が上昇していること、物流コスト上昇の影響が懸念されること等から、わずかに上回ると見込まれます。

【農 薬】

農薬の農村価格は、61年以降4次にわたって製造業者販売価格が引き下げられたこともあって2年度は0.3%下回りました。3年度は製造業者販売価格が2年12月に平均1.16%引き上げられたこと、低毒性、低農薬で効果の高い新農薬への転換が進むとみられること等から、わずかに上回ると見込まれます。

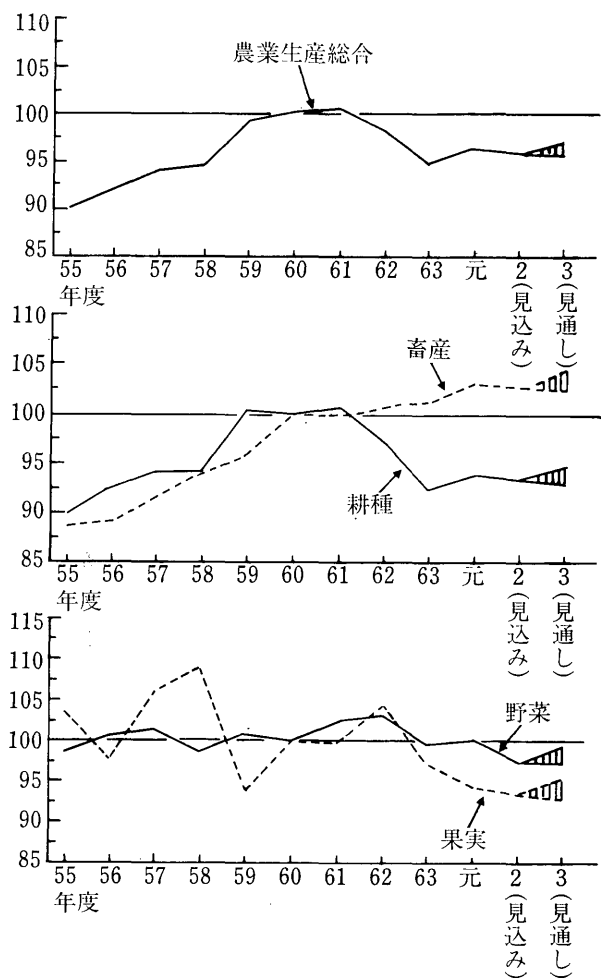
【飼 料】

飼料の農村価格は、配合飼料価格が輸入価格の上昇等により7月に引き上げられたこと等から2年度は2.7%上昇しました。3年度は、当面は現状程度の水準で推移するとみられ、2年度前半の価格が比較的高かったことから、年度を通じてみればわずかに下回ると見込まれます。

【光熱動力】

光熱動力の農村価格は、円安傾向のなか原油輸入価格が比較的落ち着いて推移したこと等から緩やかな上昇傾向にありましたが、年度後半にかけて中東湾岸危機の影響により一時石油製品価格が急騰したこともあって2年度は9.3%上昇しました。3年度は、石油製品価格の低下からやや下回ると見込まれます。

図 1 農産生産指数の見通し (60年=100)



2. 農業生産

2年度の農業生産は、耕種生産が0.5%程度減少、畜産が0.3%程度減少したことから、0.5%程度減少したとみられます。3年度は、耕種生産が野菜、果実等が増加すること、また、畜産が豚を除き増加することから、それぞれわずかに増加し、全体でもわずかに増加すると見込まれます。

以下は、主要農産物の見通し等です。

表 3 主要農産物の生産

(対前年度増減 (▲) 率：%)

	元 年 度	2 年 度	3 年 度 (見 通 し)
牛 肉	▲ 5.3	2.2	やや増加
豚 肉	1.1	▲ 3.9	やや減少
ブ ロ イ ラ ー	▲ 0.7	▲ 1.4	前年度並み
牛 乳	5.4	0.8	わずかないしやや増加
鶏 卵	0.6	▲ 0.5	前年度並みないしわずかに増加
み か ん	0.9	▲18.0	かなりの程度増加
り ん ご	0.3	0.8	前年度並み
ぶ ど う	▲ 7.0	0.4	わずかに減少
日 本 な し	▲ 1.8	▲ 1.6	わずかに減少
野 菜	0.6	▲ 2.8	わずかに増加
米	4.1	1.5	わずかに減少
4 麦	▲ 4.5	▲ 4.4	かなりの程度減少
大 豆	▲ 1.9	▲18.9	大幅に増加
茶	0.8	0.7	前年度並み
花 き	8.0	4.4	やや増加

表 4 主要農産物価格

(対前年度騰落 (▲) 率：%)

	元 年 度	2 年 度	3 年 度 (見 通 し)
牛 肉	2.5	0.3	ややないしかなりの程度下回る
豚 肉	▲ 2.1	4.9	前年度並み
ブ ロ イ ラ ー	4.8	7.9	やや上回る
牛 乳	1.0	▲ 2.0	前年度並みないし堅調に推移
鶏 卵	22.5	19.8	やや下回る
み か ん	13.6	30.8	わずかないしやや下回る
り ん ご	25.0	3.3	前年度並みないしわずかに上回る
ぶ ど う	16.1	10.1	やや上回る
日 本 な し	34.4	15.7	やや下回る
茶	13.3	▲ 5.3	前年度並みないしわずかに下回る
花 き	2.9	6.0	前年度並みないしわずかに上回る

【畜産物】

(牛 肉)

枝肉生産量は、と畜頭数の増加等によりやや増加すると見込まれます。牛肉輸入量（3年4月から自由化）は、輸入牛肉在庫の取り崩しが進むとみられることから前年度並みないし下回ると見込まれます。

卸売価格は、牛肉総供給量（生産+輸入+在庫取り崩し）が増加するとみられること等から、安定価格帯内で推移するものの、ややないしかなりの程度下回ると見込まれます。

(豚 肉)

枝肉生産量は、子豚生産頭数が減少していること等から年度を通じてみればやや減少すると見込まれます。輸入量は、生産量が減少するとみられることからややないしかなりの程度増加すると見込まれます。

卸売価格は、おおむね安定価格帯内で推移し、ほぼ前年度並みと見込まれます。

(ブロイラー)

出荷重量は、交易条件が向上しているものの、地域によっては処理場における人手不足問題が出

ていること等から前年度並みと見込まれます。輸入量は加工度の高い解体品に対する需要が引き続き増加するため、やや増加すると見込まれます。

卸売価格は、消費が増加するなかで国内生産が伸び悩むとみられること等からやや上回ると見込まれます。

(牛 乳)

生乳生産量は、生乳需給が引き締まり傾向で推移していること等からわずかなしやや増加すると見込まれます。乳製品向け生乳処理量はかなりの程度増加すると見込まれます。

生乳農家販売価格は、飲用牛乳の消費が増加するとみられること等から前年度並みないし堅調に推移すると見込まれます。

【果 実】

(みかん)

収穫量は、結果樹面積が減少するものの、単収は表年に当たることからかなり大きく上昇することから、かなりの程度増加すると見込まれます。

卸売価格は、収穫量の増加が見込まれること等から、わずかなしやや下回ると見込まれます。

(りんご)

収穫量は、結果樹面積がわずかに減少するとみられるものの、単収がほぼ前年産並みないしわずかに上回るとみられること等から、ほぼ前年産並みと見込まれます。

卸売価格は、単価の高いふじ、つがる等の比率が高まるとみられること等から、ほぼ前年産並みないしわずかに上回ると見込まれます。

【野 菜】

野菜の作付面積は、緑黄色野菜が増加しているものの、重量野菜、夏秋野菜の果菜類が減少傾向にあり全体ではわずかながら減少傾向にあります。2年度の生産量はわずかに減少したとみられます。また、卸売価格は、天候不順等により入荷量が減少したことから秋冬野菜を中心に上昇し、年度間では大幅に上回りました。

(春野菜)

収穫量は、ほぼ前年産並みと見込まれます。

卸売価格は、葉茎菜類、果菜類が下回るとみら

れることから、わずかに下回ると見込まれます。

(夏秋野菜)

収穫量は、根菜類が作柄が悪かった前年に比べやや増加するものの、全体としてはほぼ前年産並みと見込まれます。

卸売価格は、根菜類、果菜類が下回るとみられることから、わずかに下回ると見込まれます。

(秋冬野菜)

作付面積は減少するものの、収穫量は、作柄の悪かった前年に比べやや増加すると見込まれます。

卸売価格は、根菜類、葉茎菜類が下回るとみられることから、やや下回ると見込まれます。

(注) 季節区分は個別品目により多少異なるが、おおむね春野菜は4～6月間、夏秋野菜は7～10月間、秋冬野菜は11～3月間となっています。

【米】

3米穀年度(前年11月～当年10月)の主食用等の需要量は、前年度並みないしわずかに減少、3年産の水陸稲の作付面積はほぼ前年産並みと見込まれています。なお、最近の作付動向としては、新しい品種のあきたこまち、きらら397等が増加しています。

2年8月に自主流通米の価格形成を図るための場を開設運営する機関として(財)自主流通米価格形成機構が設立され、10月以降、自主流通米の入札による取引が実施されています。これまでの入札結果をみると、産地品種銘柄ごとに多様な値動きとなっていますが、概して東北ササニシキ、関東コシヒカリの価格が低迷した一方、北海道きらら397、青森むつほまれ等の銘柄に低価格米の品薄感から人気が集まりました。

【切 花】

切花の生産は、需要が依然として強く、価格も堅調に推移していることから今後も現状程度の伸びが見込まれます。

切花の生産者価格は、供給量が増加するとみられるものの、需要が堅調であることから、ほぼ前年産並みないしわずかに上回ると見込まれます。